

リチャード・ウェストン

『ブラバントおよび

フランダース農業論』再考

加 用 信 文

一

イギリス農業革命当時の最も古農書に精通した農業著述家ウォルター・ハート Walter Harte によって「農業における最高の業績」とされ、また有名なアーサー・ヤング Arthur Young によって「ニュートン以上の大恩人」とされたサー・リチャード・ウェストン Sir Richard Weston の『ブラバントおよびフランダース農業論』に関しては、本誌（第一九卷第二号）のノートにおいて、私の渉猟しえた限りでの諸文献によって考証を行ない、その原著書の刊行年次およびその内容について、かなり思い切った推論を試みた。ただしそのノートの（後記）にも

《ノート》 リチャード・ウェストン『ブラバントおよびフランダース農業論』再考

誌したとおり、当時大英博物館 British Museum に注文した約二〇種の古農書のマイクロ・フィルムの中に、その原著の入手の見込がついていたが、それを発見しないままで提出せざるをえなかった。その年の秋に現物が到着し、サー・ウェストンの原著のみでなく、他の貴重な参考文献にも接しえたので、ここで改めて再考を加えたいと思う。

まず、大英博物館から送付されてきたウェストンの原著は、有名な農書考証家のフノセル G. E. Fussell が、大英博物館の所蔵本は一六〇五年の誤植本——これは前稿で考証したことく、一六四五年のいわゆるウェストン本と異なるいわゆるハートリプ本初版で、一六五〇年の誤植——と記していることから、この誤植本とまいこんでいたところが、意外にも一六五二年版、つまりハートリプ本の第二版であった。この版は、タークス H. Dircks の記述どおりの小型四ツ折判で、そのフルタイトルも、ゲークスの記載と同じであるが、ただ書名の Discourse が、タークスの記述と異なり、ハートリプ本の初版（誤植本）と同じく Discours となっており、しかも冠詞が付加されたとすれば、一六四五年のウェストン本が Discourse であったに對し、ハートリプ本は初版・第二版とも A Discours に改えたものと想定される。

そのタイトル・ペーンは、次のとおりである。（前稿のダー

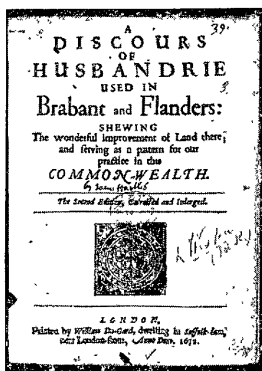
クスからの引用に誤植があったので、その訂正もかねて再掲することにする。)

A Discours of Husbandrie used in Brabant and Flanders : shewing the wonderful improvement of Land, there, and serving as a pattern for our practice in this Common-Wealth. *The Second Edition*, Corrected and Enlarged-London, Printed by William Du-Gard, dwelling in Suffolk-lane, near London-stone, Anno Dom 1652.

この内容構成は大体ダークスの記述とおりであり、その冒頭に刊行者サミュエル・ハートリブ Samuel Hartlib の手になる△国務会議諸公に捧ぐ△と記した献辞六葉があり、それに続いて同じくハートリブの手になる序文 (To the Reader) 一葉——この中の記述については後でふれる——が置かれ、その後本文がある。ダークスは初版本 (誤植本) の本文を二六ページと記しているが、何故かこの第二版についてはページ数を記していない。原物をみると二七ページであるから、一ページだけ増えている。

本文の標題には、△サリー州のサントンの故サー・リチャード・ウェストン、一六四五年に彼の息子たちへの遺言△ Sir Richard Weston late of Sutton in the Countie of Surrie his

Legacie to his Sons, &c Anno Dom 1645とあり、△余の息子たちよ△ (My Sons) という呼びかけの言葉ではじまるが、その原文のちょうど四ページまでは、ハートリブの『遺言』Legacie 第二版 (一六五二) の冒頭に掲出しているウェストンの序文と同一のものである。ただ、この『遺言』に利用された部分は、イタリックを地として Discours を Discourse に改えたり、heathie を heathy としたり、only を only に改えたりして近代英語の綴りに改良している反面、逆に common, course, leave, receive 等が comon, cours, leav, receiv に直されている。また原文中の大文字を小文字に改えたりしている



Richard Weston の Discours, 1652
のタイトル・ページ (大英博物館蔵)

が、内容的に改めた唯一の箇所がある。それは、原文では、「ブラバントとフランクローズの勤勉なひとは、一年にせいぜい五ポンド（¹）以上の価値のない五〇〇エーカーの不毛のヒース地を、七年以内で年に七、〇〇〇ポンドの価値にするであらう……」という一節の七、〇〇〇ポンドを七〇〇ポンドとついでる点である。

この序文の部分は、原著では独立せしめず、そのまま本文が続いており、本文二七ページの後に、ハートリプのサー・ウェストン宛の書簡の写し「A Cope of a Letter written to St. Richard Weston」二葉²、³また「通の書簡」Another Cope of a Letter written to St. Richard Weston」一葉が付加されており、前者の日付は一六五一年五月二日、後者の日付は一六五一年一〇月一〇日となっている。これも既にダークスの記述どおりである。なお、書簡の後に、フランドーズの優良なクロパー・亜麻・大麻の種子の欲しいひとは Mr. James Long の店で、適当な値段で入手できる旨が記されている。

要するに、ウェストンのハートリプ本第二版の構成は、ほとんどダークスの記載どおりであるから、彼がこれを見出したことは確かと思われるが、その本文の内容そのものについては、全く触れてないことは、前稿で記したとおりである。ここで、原著の内容について述べるまえに、この原著の刊行後の諸文献

についての考証において、前稿執筆の際その原物を参看しえな
いたために省略せざるを得なかった重要な文献が、同じく大英博
物館からのマイクロ・フィルムで入手することができたから、
まずそれによって、前稿の考証を補充することからはじめたい。
注(一) G. E. Fussel, *The Old English Farming Books*
from Fisherbert to Tull (1523 to 1730), 1947, p.
42

(2) H. Dircks, *A Biographical Memoir of Samuel Hartlib*, 1865, pp 62~65

II

(一) まず最初にとりあげるのは、カブリリエル・リープ Gabriel Reeve の *Directions left by a Gentleman to his Sonns*, 1670 なる著述である。それは前稿で「マクドナルド Mc Donald」の著書中のタイトル・ページの写真版を掲げたものと同じである^(一)。ただし、この写真版のペン字の写入れからみて、大英博物館所蔵本ではないと断定しうる。これをマクドナルドはウェストンの原著とは別書としているが、これが原著の複製本であることは、すでにハート等が指摘しており、前稿においても同一物と推論したが、果してそのとおりであった。正確にいえば、ハートリプ本と同一の内容のものと断定しうるのである。この

リープの覆刻本には、冒頭に Kenrick Eyton Egure, *Of the Inner Temple* に対する献辞四葉があり、その末尾に一六七〇年三月一四日付でリープの署名がある。その内容には、なんらウェストンには触れず、全く自著を献呈する形で述べられているから、すでに指摘するように、ウェストンの原著の刊行後僅か二〇年足らずにして、全く同じ内容のものが、別人の著述として翻刻的に刊行されても、別段怪しまれなかったのは、ウェストンの原著がいかに一般には普及されていなかったかを裏書きしている。なお、一八世紀初頭の最初權威ある農業百科事典 *Dictionary Rusticum* (一七〇四) の参考文献の中でも、これをサー・ウェストンのものと別書として扱われていることは、前稿で記しておいたごとくである。

ところで、マクドナルドも、リープの翻刻本を別書とみて、その内容を数行に亘って紹介しているので、これを重要な手懸りの一つとして、前稿において、ウェストンの原著の内容の要約を、ハートリプの『遺言』第三版(一六五五)の中に挿入されてあるハ指図Vの一文と推論したのであるが、これこそんでもない間違いであって、彼のトリノクにかかっていたことは、後で明らかにすることにしよう。

(三) 次の重要な参考文献は、アンドリュー・ヤラントン *Andrew Yarranton* によるクローバーに関する始めてのモノグラフ

フービー著。彼が *England Improvement by Sea and Land* (Part I 1677, Part II 1681) の著述にちつて、一部にイギリス経済学の真の創建者とされていることで知られているが、⁽²⁾ その内容は他愛ないものでしかなく、より高く評価すべきは、これよりも約二〇年前に刊行した農業の近代化に重要な役割をもったクローバーに関する本書であると考えられる。この初版はほとんど亡失されたとみられ、現存するのは第二版で、一二折判の本文四六ページの小冊子である。

そのタイトル・ページは、次のこときものである。

The Improvement improved by a Second Edition of the great Improvement of Land by Clover or, the wonderful Advantage by and right management of Clover, by Andrew Yarranton of Ashley, in the County of Worcester London. Printed by J C for Francis Red, Bookseller in Worcester. 1663.

〔注〕この第二版のタイトルページは、マクドナルドの著書には掲げられてないが、フーセルの著述中に載せている写真版は、⁽³⁾ 明らかに大英博物館の蔵書である。フーセルは、この書の初版に関して「マクドナルドとアーシルともに、初版を The Great Improvement of Lands by Clover, 1663 とし、前者は、それを四ツ折判として」

る」と述べている。アーナル Lord Ernie の巻末文献中には、そのサブタイトルをも付してあり、それは、本文に掲げた第二版のサブタイトルでみても、明らかにおかしいと思われる *by and right management of and the* に改められている。しかし、誰もが、初版を突見した形跡はない。にもかかわらず、マクドナルドは、ページ数も第二版と同じとしているが、内容の改訂がされているとすれば、同じページ数でありえないと考えられる。

私は、この初版を、当面次のように考証している。

初版の書名は、*The Great Improvement of Land by Clover* だ、サブタイトルは多分マクドナルドのごとく *and that the* になつていたのであろう。

初版の刊行年次は一六六二年で、おそらく同年の二月三月頃に刊行され、第二版が翌一六六三年の前半期に改訂版として刊行されたであろう。その根拠は、第二版の序文 *へ To the Reader* の日付が一六六二年一月二日となつてゐるが、当時の印刷事情では脱稿後一〜二カ月で刊行されている例が大部分だから、この序文執筆直後の一六六二年の春に初版が刊行されたと推定される。ただし、この序文の内容は、本書刊行の趣旨を述べたものであるから、第二版にも、そのまま採用されたものと考

えられるからである。さらに、第二版の本文の末尾の三四〜四一頁にかけて、その初版をみて記されたと思われる著者宛の「B なる署名の書簡を掲載しているが、その日付が一六六二年一月三日と判読できるから、初版の刊行は明らかに一六六二年とするのが妥当と考える。その書名についても、第二版の本文の標題にある *The Great Improvement of Land by Clover* が、とくに初版のものを改訂することなく、そのまま引用したものとみられる。前記の諸学者が殊更に *Land* を *lands* としているのは不可解である。なお初版の書判およびページ数は不詳。

第二版は、内容的に初版を改訂している点で、処々に指摘できるが、とくに重要なクローバーの播種期に関する改訂の記述を、次に引用しておく。

「その播種期に関しては、私の前書〔初版〕では、三月一日から四月下旬までが最適期であると述べたが、早魃にやられないまえに、その種子を発根させる期間を与えるためには、いまは三月中が最適期と考える。私が前書を執筆して以来、若干の試験をしたが、私は八月と九月の各週に播種してみた」(二三頁)。

このヤラントンの著書の序文において、クローバーは一六五

○年代にイングランドの各地方に、一時的にはかなり伝播したが、それが数年にして衰退したと述べ、その原因はクローバーの栽培に関する正しい認識の欠如によるものとしている。そこで彼は、その栽培上の四つの欠陥を挙げて、これらの欠陥を除くために努力した結果、本書によって正しい栽培法に基づく土地改良法を説こうとする意図を表明している。

ここでは、この著述の内容は省略して、彼の著述がいかに関ウェストンに関連をもつかについてのみ検討してみよう。この本文の中で、最初にウェストンに関する、次の記述を見出す。

「約一三年前に、サー・リチャード・ウェストンは、フランダーズとプランターの旅行中の観察と商人やその他のひとたちとの会談 (discourse) によって、不良な不毛地にクローバーを播種することで莫大な利潤を生ずることを識つて、それに基づいて、自国にその農法 (husbandry) を導入したのである。かくて、僅かの間に、それが自然に拡がってイングランドの大部分の州で、それが (多少とも) 播かれるようになり、かなりの好評が続いたが、まもなくそれをやめる者が出てきて、ついには大部分が放棄されるに至った。確かに、それは (何にもまして) 不利益な状態であつたから、それを改めざるかぎり、やむを得なかつたのである。」(三〜四頁)

ここでウェストンに関して約一三年前というのは、原著の刊行年次からみて、一六五〇年刊の原著 (ハートリブ本初版) に拠るものと考えられる。とすれば、ヤラントンの唱える正しい栽培法の内容は、このウェストンの原著の指示した方法を祖述し、或は踏襲していると推察される重要な文献とみられる。しかしすでにウェストンの原著を突いたあとからみれば、ヤラントンのクローバーの栽培法は、その播種期や播種量についても、ウェストンの原著とは、全く異なつた内容が述べられていたのである。

ただ、ヤラントンがウェストン自身の言葉 (his own words) として掲げている次の一文が注目される。

「サー・リチャード・ウェストン曰く、クローバーの後には犁耕した土地は、三年乃至四年間は小麦の豊作が続く、さらにそのあと一年の燕麦の収穫が得られる。そうすれば、再びクローバーに戻してしまえばよい。」(一一頁)

これには出典を挙げてないが、前記の約一三年前ということから、一六五〇年刊の原著の中からの引用と推定されやすい。しかし、この一文は、原著にはなく、前稿で考証したところのハートリブの『遺言』(Legacy 第三版 (一六五五) 中に挿入されたハサー・リチャード・ウェストンのクローバーの最良の管理に関する特別の指図) Sir Richard Westons more special

directions for the best ordering of Clover-grass の中からの引用——ただ最後のクローバーに戻すという記述のみはヤラントンが付加したもの——であることは、容易に気づかれる。とすれば、ヤラントンがクローバーに関する独立の著書にないですら、僅か一〇数年前に刊行されたウェストンの原著を真見してないことが判明するとともに、後で明らかにするように、この△指図▽の記述に関するハートリプのトリックを打破ることができなかったことを立証する一材料となる。

(四) 最後に、フッセルが「サー・リチャード・ウェストンのクローバーの実験に論及している」と記しているスピード・Ad (Adolphus または Adam) Speed の次の著述を検討してみよう。

Adam out of Eden : or, An abstract of divers excellent Experiments touching the advancement of Husbandry, shewing, among very many other things, an Improvement of Ground by Rabbits from 200 l. annual Rent, to 2000 l. very profit, all charges deducted. by Ad. Speed Gent London, Printed for Henry Brome, at the Gun in Ivy-Lane, 1659

これは、一二折判の小型本で、本文は一七九ページである。(サブタイトル中の Rabbits は、明らかに兎 Rabbits のミ

スプリント)

このスピードの著書には、確かに第五章「クローバーについて (Of clover-grass)」で、五ページに亘って、ウェストンに関する記述がみられる。その内容は、前述の△指図▽の要約と異なっているのみか、その記述の分量も遙に豊富であり、ウェストンに関する最も詳しい文献といえる。しかして、その記述は、ウェストンの原著に関するものでなく、彼自からのウェストンの農場見聞記として記されている。

その最初の一節は、次のごときものである。

「サー・リチャード・ウェストンは、私には三〇エーカーと四〇エーカーの間と思われる土地を所有しており、そのうちの一〇エーカーに今年 (this year) 大麦とクローバーを共播した。その大麦を刈取れば、一エーカー一〇ポンドの価値に達するほどであることが分ったが、彼がおそれたのは、クローバーが大方土地から芽を出そうとしているのを認めたのに、それ〔大麦〕がその障害になるかもしれないということであつた。サー・ウェストンは、その葉がニンニクほどには大きくなかつたが、それを見て喜んで、ミカエルマス〔一〇月二九日〕までは、その中に何も入れないことにして、そのときまで一雨につぶり降れば、大麦が刈取られたあとは、それが土地を蔽うようになるよう熱望

している。昨年 (last year) 彼は各ハーエーカーの二つの耕田 fields の一つにフランタースの種子を、他の一つには穀つきの自家の種子を播いた。前者は、その土地で非常に出来がよかったので、去る五月中旬の販売の際に、採種用だけでは一〇ポンドはとれないだろうと、予言していた。」

この引用の中で、今年・昨年というような表現を用いている点は後で説明することにし、ともかくスピードがウェストンの農場を実際に見聞して彼と会談したように記している。まずその内容に疑問が生ずるのは、ウェストンの農場が僅か三〇〜四〇エーカー程度の小規模としている点である。彼の息子たちへの遺言で五〇エーカーの作付方式を指示しているのに比し、あまりにも過小であるからである。さらに重要な点は、ウェストン自身がクローバーを大麦と共播したという記述である。これは八指図Ⅴの中で蕎麦と共播することを勧めていることと共通しているが、後述するごとく彼の原書の播種法とは全く異なっているのである。しかもスピード自身が別の個所で、ウェストンから聞いたクローバーの播種法に関する次の記述とは明らかに矛盾しているのである。

「彼が、それ(クローバー)の播種のしかたを、いろいろな方法で実験してみても発見した最良の方法は、さしあたり他の穀物と共播せずに、単独 (alone) に、四月中旬はじめ

に播くのが最良であるということである。」

また、ウェストンのクローバーによるヒース地の改良に関する経験と意見に関し、スピードは次のことく記している。

「彼は元は一エーカーノリングの価値すらもなかった一区画のヒース地に、クローバーを栽培して、本年は並はずれて大きなソバ (buckwheat) を収穫した。そのほか、彼は亜麻には乾燥した土地が必要であると語した。最後に、サン・フアン (St. John) はすばらしく利益があり、年間に七〜八回の刈取が出来るが、ただ非常に豊沃な土地であることを要し、しかも全く放牧してはならないと語った。」このヒース地の改良に、まずクローバーを三カ年栽培したあと、ソバをつくるという方式も、彼の原著のやり方とは全く異なっているのである。なお、ここでウェストンの亜麻にふれている点は、後で述べるように重要な問題であるが、スピードの亜麻に関する章には、なんらウェストンの名が出てこない。また、カブに関する章においても、同様である。

かくて、スピードのウェストンに関する記述は、その原著に拠るものでなく、むしろその内容とは異なったものである。それは一見実際の農場見聞記とみられるが、それが果して事実であったかどうか問題となる。まず、本書の刊行が一六五九年となっているから、本文中の昨年・今年の表現は明らかに年代

的に矛盾している。しかし、実は本書は私家版として一六五〇年頃印刷されていたことが判定されるから、ウェストンが一六五二年まで生存していたとすれば、一応年代的な矛盾は解消する。それにしても、前述の見聞の内容からみて、さらには彼がウェストンの剽窃者ハートリプとの親交関係等から推して、作為的な架空会見記と断定してもまず誤りはないと考えられる。

〔注〕 スピードの著書の時代的考証に先立って、マクドナルドの著書には、このスピードのタイトルページの写真版を掲げ、この内容をかなり詳しく紹介しているが、この書の成り立ちに関して、それは「農業の進歩に関する種類の優れた実験の抜萃であり、且つ、ブライスによると、この作品はハートリプの好意によって公開されたものである……」と述へ、統いて、その序文の一節を、「スピード曰く」として引用している⁽⁶⁾（フ・セルもまた、この序文をスピードの筆とみなしている⁽⁷⁾）。しかし、この序文〈To the Reader〉を読めば、容易にこれがスピードの筆でなく、後人がこの書の成立の経過を述べていることは、序文中の「重大にして必要な作業の増進に関して、わが真摯な著者 (Author) の諸観察と経験が、永らく個人的にしか人手できなかったのを、或る公共心に富む紳士の好意によって、公開されるに至った」という記述に

よっても、明白である。さらに、マクドナルドも指摘しているブライス Walter Blich の著書 *The English Improver Improved*, 1653によると、その中に数ページに亘ってスピードのことに触れているが、本書に關して、次のごとき記述を見出す。

「私の現在の知人であり、しかももう数年間知り合いとして会っている或る人がいるが、その著書 (Books) は私家版 (private) で、とくに彼自身と彼の代理人によって、貴族および紳士の手に渡っている。私もそれ入手することができて、私が愚かであったこととにも、賢くなったことを覚った。というのは、私は彼の真価を見抜くだけ賢くなかったからであるが、いまや、それらの書物は Stationers shops で販売されて、広く国中に拡がるようになった。」

「スピード氏について識りたい人は Charing-Cross の向いに住むサムエル・ハートリプ氏から、その人柄と才能について詳しい情報が得られる。私の知るところでは、氏は彼がいくつかの構想 (discoveries) をつくり出している間の数カ月間は、彼を自分の家に泊めるほどの同情心に厚い紳士である。」

このあとの一節中の discoveries については、ハート

の解釈では、「プライスがいうには、ハートリプは、スピードが彼の農業の諸改良についての書物を作る (compose) 間、彼の家に泊めて世話をした」と解しているから、スピードの著述は、ほぼ一六五〇年頃にハートリプ家で執筆され、それが公刊されずに、私家版の形で一部のひとびとの手に渡っていたものと解される。(なお、Stationers shops という複数の店名は、多分当時の社交の広場として勃興したコーヒー店でないかと想像される。それは当時のジェームズ・ワット、James Watson の Husbandry Anatomized, 1697 の序文中からも窺われる。)

なお、スピードの著述の年次については、アムハースト Alice Amherst の A History of Gardening of England, 1895 の巻末の文献目録に、ワット Robert Watt の著述——おそらく Bibliotheca Britannica, 1624 か——に、Adam out of Eden の初版は一六二六年刊の八〇折判で、一六五九年のものは複製版 (reprint) と記してあるそうであるが、その根拠は明らかでない。本書の記述の内容からみて、とうていそこまで年代的に遡ることは考えられない。

ここで、プライスの前掲の引用箇所の中では Books と

あるから、スピードの私家版は、一種でなさそうであるが、ハートリプとの関係から思い浮ぶのは、一六五一年にハートリプの名によって刊行された The Reformed Husbandman である。これは四〇折判の僅か一四ページの小冊子であるが、当時の穀物の散播方式の技術的内容について、きわめて興味深い観察がみられる。この書のサブタイトルの中で「数年前にサムエル・ハートリプに寄せられたもので、いままた彼によってすてへの真摯な紳士に対し再び寄せられたもの……」とあって、その寄稿者の名を明記していないが、これを、古農書文献の考証家 R・ウェストンの農書カタログに The Reformed Husbandman, imparted to Hartib by Speed と記されて以来、広くスピードの著述されているところであるから、ハートリプの家で執筆したスピードの著述の中には、この書も含まれていたとも推定されよう。

ついでに、ハートリプの刊行書の中に、この書名に類似した The Complete Husbandman, 1659 というのがあるが、この内容はまさしく、彼のウェストンの序文つき『遺言』第二版 (一六五二) そのままの複製本である。つまり、前稿で考証した通り、この第二版は、次の第三版 (一六五五) では、サブタイトルをも変更し、序

文のウェストンの遺言をすら除いてしまったのであるが、その僅か四年後には全く別の署名で再刊されたのであって——その主内容をなす長文書簡の筆者 Rob. Child の名を明記した第三版から再びその筆者名が消されている点まで、全く第二版の再刷である——、機を見て人の名声を利用し、或は剽窃をもてするハートリプの本領が遺憾なく発揮されている。これには、いま述べたことに関連して、ハートリプを目して、公共心に富む紳士と称揚しているブライス自身も、やがてハートリプによってウェストンの名によるトリクの材料に盗用されるという運命に会うのである。

- (1) Donald McDonald, *Agricultural Writers, from Sir Walter of Henry to Arthur Young*, 1908, p. 107
 (2) 同書 P. E. Dove, *The Account of Andrew Yarranton, the founder of English Political Economy*, Edinburgh, 1854 に発する。この概要の紹介は、村橋誠一郎『西洋経済古書叢書』四九〇五一頁参照。
 (3) Fussell, *op. cit.*, opposite to p. 88
 (4) Lord Ernle, *English Farming, Past and Present*, new edition, 1961
 (5) Fussell, *op. cit.*, p. 34

- (6) McDonald, *op. cit.*, pp. 103~107
 (7) Fussell, *op. cit.*, p. 54
 (8) Walter Harte, *Essays on Husbandry*, 1764, Essay I, p. 23, footnote

三

ここで、いよいよウェストンの『フランドトおよびフランダーズ農業論』（一五五二）の内容に立入ることにしよう。

まず、その構成は、前述のこくく、ハートリプの献辞五葉が冒頭にある。これはハートリプ本の初版での三葉とは異なるが、内容的には大差はなさそうである。その中には、農書考証家ハートが引用している「農業が共和国 Common-Wealth⁽¹⁾に属する最も貴重にして必要な産業部門の一つである……」の二節が確かに見出される。その内容は、とくに述べる要はないが、ただこの献辞およびこれに続く序文一葉の中には一言もウェストンの執筆であることは記されてなく、自らの記述のごくみせかけている。

その短い序文（To the Reader）には、後の考証のための注意すべき記述が潜んでいる。その冒頭に、「このフランドト農業論第二版は、私が予定したほど増補されていないが、それはサー・リチャード・ウェストンから何物かを期待していたのに、

それが得られなかったからである。」という、前稿のタークスの

引用句そのままの文句があり、それに続いて「私がそれに用いた手段を、この書に付した書簡の写しで示しておこう。それには私の農業の遺言(my Legacy of Husbandry)の初版(一六五〇)と第二版(一六五二)でした約束に対し、許可を願ったものであったが、私が実行したいと希望した事の全部を欠くことのないように、二つの事柄に関し注意を与えよう。」と述べて、次の二点を記している。

その第一は、イングランドに生ずる牧草の中には、クローパーとは別種の Well と呼ばれるものがあり、それはイングランドでは、クローパーよりも有利で栽培し易く、これに關しては親友のウォルター・ブライスが詳しくその方法を公表していること、第二は、ブラバント農業論の中で、クローパーの種子の使用法は、未経験な農業者にとつて、実験に基づく十分な説明がなされていないから、「これに關しては、ブライス氏の English Improver 第三刷(それは近く刊行の見込)がより詳しい指図(directions)を与えるであろう」こと、の二点である。前者の Well なる牧草は、当時のどの農書にも見かけないが、ここで後の記述と関連してとくに注意を留めておかれたのは、後者のブライスに關する記述である。

なおこの第三刷というのは The English Improver Impr-

oved, 1652 を意味することを指摘しておこう。

〔注〕 ウォルター・ブライス Walter Blith の著述の正確な考証はされてないが、ここでは、私の考証の過程は別の機会に譲り、結論的な各版の書目と刊行年次を記しておく。

初版 [A] Survey of Husbandry, discovering the best method of improving all sorts of Land. fol 1649

第二版 The English Improver, or, a new Survey of Husbandry discovering to the Kingdom that same Land, both Arable and Pasture, may be advanced Double and Treble, and some Five and Ten fold 4to 1649

第三版 The English Improver Improved, or the Survey of Husbandry Surveyed, discovering the Improveableness of all Lands, Some to be under a Double and Treble others under a Five or Six Fold, yea Some under a Twentry fold Improvement sm 4to 1652

すなわち、初版と第二版は、同年の一六四九年刊行で、初版は二つ折判の大製本であるに對し、第二版は四つ折

判となり、第三版はさらに小型四ソ折判となっている。

内容的には、第二版までは二五章であるに對し、第三版では第二部 (Second Part) を設けて、その中に第二六・四四章を増補している。この第三版の第二部の中に、前述の序文でハートリブが特記しているクローバーの記述が現われる。(なお、この一六五二年版が第三版に當ることは、ハートの著書にも記してあるが、ただ刊行年次を一六五三年と間違えている。)

さて、原著の本文は前述のことく、「余の息子たちよ」という呼びかけの言葉で始まる書簡体の形式で、最初の四ページまでの記述は、ハートリブの『遺言』Lecture の初版・第二版の序文として利用されたものと同じであるが、原著では序文として独立せしめず、直接次の一齣が続いている。

「農業における最も重要にして基本的な点は、耕作する土地の性状に通じていること、且つその土地が自然力によるか、或は技術 (Art) によって最大の利潤と利益を齎らうる生産を挙げうような種子を播くこと、であるのは確かである。余は三〇年の農業の経験のあと (イングランドを渡ったときには) すでにその点を会得して、自己の土地を、この王国の誰もが行なってきたことく、水と火によって (by Water and Fire) 改良してきたと思っていた。しか

し、余がブラバントとフランダーズに暫らく滞在した後で、余は農業に関する或る新らしい教訓 (a new lesson) を学ぶべきことを覚つたのである。それはこれらの兩國におけるヒースの砂質地が、そこで実施されている通常の方法によつて、その兩國に存在する最も重粘で且つ豊沃な土地以上に、豊かな生産物を生産していたからである。」

この一齣中の言葉が、その後の著書の中には、原典を示さずに、いわば落ち穂的に利用されていることは、前稿に掲げたウエストンに論及したいくつかの引用からも、気がつかれたと思う。とくに、彼がイングランドを渡つとき、すでに「三〇年の農業の経験」をもつていたことは、伝記的にもかかなり広く用いられている。私見として、これに多分の疑問を表明しておいたが、この同じ原著を裏見したダークスも指摘しているとおり、本文に記載せられていることが確認できる。ただ、彼の年令等の上からみて若干の疑義が残るが、なお一つには剽窃・改竄の常習者である刊行者ハートリブに対する私の不信感によるものである。

またロード・アーンル Lord Enlle の著述中に、全く説明なしに引用記号を付した「火と水によつて」"by Fire and Water" というのは、前文の「水と火によつて」という表現を転倒していることが判明するが、その内容は後述するように

Devonshire を意味する表現であろうとする前稿の推論は、本文で確認されることである。また、フランダース農業から「新しい教訓」(a new lesson)を得たという表現も、ときどき落ち穂的な利用がなされているが、ここで農書でなく、近年のイギリス経済史の代表的著述の一つとされているリプソン⁽³⁾、Lipson の著述の中の一節を掲げてみよう。

「〔新農業に関する〕真の刺激は、サー・リチャード・ウェストンが、イングランドにおける三〇年の経験のあと、フランドルとフランダースに滞在して八新しい教訓⁽³⁾を学び、A Discourse of Husbandrie によって、自国の農民に効果を与えたことである。彼は、そこでカブとクローバーの集約的な耕作に感動して、それらの作物をこの国でも園地(gardens)でなく耕地(fields)に栽培すべきことを勧告した。それらはフランダース農業論⁽³⁾として知られるようになった。」

〔注〕 リプソンは、この原典を A Discourse of Husbandrie, 1645 とし、前半の部分はその五頁、後半は一四、二六頁と注記しているが、前者は一六五二版にも確かに五頁に見えるが、後半の部分は該当頁には見当たらない。それにしても、リプソンが亡佚されたとみられる一六四五年版のウェストン本を実見して引用したとは信じられない。

さて、この後に、ウェストンのフランダース旅行記がはじまる。彼の全行程は、まず Dunkirk に上陸して、そこから約四〇哩離れた Bridges を経て、その先き二四哩の Gaunt に赴き、さらに三〇哩離れた Antwerp に着いて、そこに数カ月滞在したあと、再び Gaunt に引返して滞在して、また Antwerp に戻ったところまで記してあるから、おそらくそこから帰国したものと想定される。その全行程の期間は、一六四四年三々四月頃から半年以内とみられるから、おそらく一六四四年の年内に帰国して、サリー州サントンの自己の領地に帰ったと推定される。とすれば、その翌年に瀕死の病床で息子たちに遺言として、本書を書き残そうとしたのと符節が合う。ただ、彼が一六四四年の春頃に Antwerp に到着したのは直接イングランドからの水路によると考えられるから、この点でも彼の亡命説は否定される。

ところで、彼がこの行程でとくに関心をひいたのは、Dunkirk と Bridges 間の地域と Gaunt から Antwerp 間の地域(いわゆる Wares 地方)との両地域の驚くべき対照であった。すなわち、客観的な土壌条件の上では、前者の地域はきわめて肥沃な土壌で、作物として小麦・大麦・豌豆などがよくでき、また自然草地としても立派な放牧地や採草地に利用されているに反し、後者の地域は本来不毛のヒース地であって、穀物として

も小麦・大麦・豌豆には不適で、ライ麦・燕麥・フランス小麦〔ソバ〕しかできないし、また自然草地としても優良な採草地にできないような不良地で、しかも土地を放置しておけば、忽ちヒースやエニンダに蔽われてしまうような土地である。つまり、土地自体の価値の上では、前者は後者の一〇倍ほども優れているが、現実には逆に後者の地域の方がフランダーズの最良の土地よりも遙に高い利潤を挙げており、その農民（そこではボーア人 *Boers* と呼ばれている）が、他の地方よりも富裕であるという一見矛盾した事実である。その謎を解こうとしたのが、本書の重要なモティーフとなっているのである。

このような事實は、ウェストンが *Antwerp* まで行って再び *Gaunt* に引返して、そこに滞在している間に、あるオランダの商人から聞かされるのである。彼は最初は戯談と思つて、大いに反論したが、それに対し、その商人が答えたのは、次のことき理由であつた。

「そこがより多くの利潤を生む根拠は、その土地がフランダーズの富（the wealth of Flanders）と呼ばれる亜麻の適地だからである。良質の亜麻の「エーカー」は、*Dunkirk* から *Bruges* の間で育成する最良の穀物の四乃至五エーカーの価値がある。しかも、亜麻を引抜いた〔収穫した〕あと、間もなくカブが一作とれるが、それもエーカー

当りその国の最良の穀物よりも多くの価値を生じうる。その収穫後には、続いて四月頃に、同じ土地に燕麥を播くことができるが、その上にクローバーの種子を播いて、ブッシュ・ハローをかけるだけにしておけば、燕麥が刈取られたあと、クローバーが成長して、その年内のクリスマスまでにはすばらしい放牧地になる。さらに、その翌年には三回も刈取りができ、その毎回の国の最良の採草地でも出来なはいほどの多量で、しかもあらゆる家畜にとって良質の飼料を生産するのである。しかも、この良好さを四〇五年間持続できる。」

このことを聞いたウェストンは、大いに驚きを感じると同時に、これがもし事實であれば、これを範として、イングランドに多い不毛のヒース地の改良の可能なことに啓示を受け、早速その商人の言つたことが正しいかどうかを、他の正直なオランダ人に頼んで、農民（ボーア人）数人について確かめてもらったところ、かの商人のいうことと全く合致していた。そこで、彼はちやうど亜麻とクローバーの播種期に當る三〇四月に、*Gaunt* 附近の耕地を実際に見て廻つて、直接農民にも會つて、元は極端な不毛地が、これらの栽培に成功しているのを見聞した。さらに、彼は、実際に亜麻がどれだけの利益があるかを自ら確かめるために、試験的に「エーカー」の普通作の亜麻を購

入して、それを収獲して、水洗して仕上げたものを、当時の Gaunt の市場の相場で評価してみ、一エーカーで三六ポンド一四シリング一六ペンスになることを計算し、その結論として、良質の亜麻なら一エーカー四〇ポンド以上の価値を生むことを確かめた。その直後に、Antwerp に行つて、その公道沿いの亜麻畑が、彼が試験用に購入したものよりも遙に出来が良いのを見て、いっそう亜麻栽培の有利性を確信するに至った。

彼は、Antwerp で商人たちと、それに関する話をしていて、と、ひとりの商人が Antwerp から三哩以内にある不毛のヒース地を改良した農場 (a Farm upon Improvement) を所有する農業者 (farmer) のところへ同行してくれることになった。

その農場は、ヒース地を購入してから僅か五年で改良をして、現在亜麻・カブ・クローバー・ローマ蚕豆 (Roman beans) の他大部分の穀物を栽培している上に、ホップ園・果樹園・育苗園等をも経営して、非常な成功を収めていたのであった。

彼は、この改良農場の経営者に会つて、詳しくその話を聞き、その経営のやり方を実地に見学したが、彼の旅行中の最大の幸運であった。「その国の唯一人として、彼以上に余を啓発した者はなかった」(一〇頁)と特記しているほどである。彼が Antwerp に最も永く滞在して、一六四四年の六月から八月にかけて、クローバーの成長と刈取の状態を述べているのは、

この改良農場での観察に外ならない。これが、前稿でラウドン⁽⁴⁾の農業百科事典の中に、三人称の形で引用している箇所⁽⁴⁾に当るが、原文と対照してみると、若干の字句の訂正がされている。(なお、後述するスウィソアの編著の中にも、同じく、この箇所の引用があることを付記しておく。)

ウェストンが、この改良農場で、いかにして成功したかについて学び得た点は、主として次の二点であった。

その一は、不毛地の改良を行なう前提として、小作人が借地契約期間(二年)の終了後に、地主はその小作人が本来の地代以上に改良した価値を支払うという条件が先決であり、その判定は公正な第三者に委ねらるべきだという点である。彼は、それが不毛地を所有し、自からは処理できないひとが貸地する場合の通常の方法であることを、はじめて知らされたのである。(なお前稿でふれたように、ガルニエ Garnier が、ウェストンが小作権の安定の必要性を説いていると指摘しているのは、ハートリプの『遺言』中の記述に拠るもので、ここで述べている内容とは無関係である。)

その二は、彼の最も関心をひいたヒース地の改良法である。彼が前述の改良農場の経営主から聞き得た答は、次のごときものであった。

「最初に強力な連番の馬で、そこ〔ヒース地〕を耕起する。

そのとき縦横にプラウ耕を行ない、そのあとで大型のハローでヒースを剥ぎ取って、それを集めて焼く。それから一エーカーに約二〇ロード (load) の厩肥を運んで、それを土地の上に拡げて、そこで再びプラウ耕をして、第一作としてライ麦を播き、その次に燕麦を播く。燕麦の上に、クローバーの種子を播いておいて、ハローの下に一束の柴 (Gee) をつけたもの (ブノ・ニュー・ハロー) で、ハローをかける。そうすると、燕麦が刈取られたあとは、ミカエルマス (九月二十九日) 前には、立派な放牧地になる。第三年目には、余が見たごとく、三回クローバーを刈取ると、直ちに良好な放牧地に復して、クリスマスまで放牧することができる。彼は、さらに同じことを三年間は続けられうるが、そうすると再び野草に変わるだろうと考えたので、そこで、他の土地と同様に厩肥をつくる土地に利用することにして、まず最初に約半量の厩肥を施して、そこに厩肥を播き、その上に彼が前に燕麦の上に播いたように、クローバーの種子を播いた。

・ (二二頁)

この場合のクローバーの収益一エーカー二ポンドがいかにして得られたかについての答えは、牛の放牧、牝牛への給草、および第一回の刈草後を採種用にするものであるとし、これは

次のごとき利用価値があるという。

「一エーカーの (クローバーの) 一部分を乾草用とし、その他の部分を青草のまま放牧用にすれば、冬と夏にかけて四頭の牝牛を飼育することができ、しかも採種用の一エーカーから五ブノネルの収穫があるが、それは一ポンド六ペンスとして八ポンドの価値がある。その他にも青草と乾草用の第一回と第二回の刈草が出来、しかもその後は放牧地に利用できる。」 (二二頁)

さて、クローバーの栽培法について、その播種の適期は、厩麻と同様に、四月上旬に一雨あつた直後が好適であるが、厩麻はひとによつて五月末まで播きつづけることがある。彼はカブについては、この改良農場で、最初に耕起したヒース地にカブを播いているのを見たが、それはその地方一般では、ライ麦または厩麻を播いたその直後にカブを播いているのとは違っていると記しているだけで、それ以上に追求していない。それら以外の種々の作物については、彼はあまり関心がなく、強いて聞いてみたくもなかったと記している。

ここで、観察の細目は省略して、彼が以上の観察によつて学んだ結論的な感想として記している次の一文に注目しよう。

「余がここおよび Gaunt と Antwerp の間で観察したところでは、余の (以前の経験に基づいて) 砂質またはロー

ム質の土壌のいずれでも、天然にヒースが生じていても、まずデボンシャー法 Devonshire (それは後述するように、厩肥や石灰または泥灰土を適当な比率で施すフランダー農業よりも優れていると思う) によって、フランダーまたはイングラントに存在する最良の土地以上に改良しうることを推論しうる。ただし、何人もひとを富裕ならしむるに十分な多くの貨幣を生むとき商品 (commodities) を産出する土地が最良であることを論理的に否認しえないからである。……ところで、同量の瘠せたヒース地に亜麻・カブおよびクロバーをつくれれば、小麦・大麦・採草地および良好な放牧地を生ずる豊沃地以上に多くの貨幣を生むであろうから、その結果は瘠せた土地が豊沃な土地よりも優ることになる。しかし、豊沃な土地も、彼等はフランダーズの経験から、自然にこれらの商品を生産しうることを知っていると思われる。そうでなければ、それらが、彼等自身の評価によつて判明しうる利潤の点では、最良の穀物および採草地を遙に凌駕しうることを知らないはずはない。……各作物の価値を比較してみても、豊沃な土地がより貴重な商品を生産しないとすれば、より劣等な土地がより優良であると結論せざるをえない。余は、彼等の豊沃地が、これらの貴重な商品を、ヒース地や砂質地のごとく、

自然的に生産しないであろうことは、確証をもっている。

それは、余がしばしば、三六哩ある Bridges と Dunkirk の間を往来したが、そこはフランダーズの最も豊沃な土地であり、これまで余の眼で見たかぎりの見事な小麦・大麦および採草地があつたにもかかわらず、余の記憶では、どこにも一エーカーの亜麻・カブまたはクロバーすら見かけなかったからである。これは Gaunt と Antwerp の間 (三〇哩あり、国中で最も劣等地であり、ちょうどサリー州の Sandie-Chapel か Windsor-Forest における一部のヒースに似ている) と対照的である。余がその公道の両側に沿った数百エーカーの見事な亜麻・カブおよびクロバーを見たが、穀物はライ麦・フランス麦 (ソバ) および燕麦の外は全く見かけなかった。

不毛地・ヒース地および砂質地を、かかる貴重な商品を生産しうるまでの豊度にするのは、厩肥のみでなく一つには固くて重礫な土壌よりも瘠瘠で膨軟な土壌での生産に適する種子の性質である。もつとも、厩肥は不毛地を温ため和らげ、改善する効果があるし、また水和しない石灰と泥灰土とは、土壌と灰で適当に調合すれば、非常に効果があるのであつて、後述するごとく、土地を永続的に豊沃ならしめる。しかし、芝土 (turf) の燃焼 (われわれは (イン

グラントでは」、デボンシャー法 Devonshire と呼んでいる)は、三年後には土地を悪化せしめるというひとがあるだろうが、余は自己の経験からどんなヒース地でも良質な厩肥や石灰または泥灰土を適当な割合で施して、完全な下拵えをして、それに養物を与えて播種して成熟せしめるような農業、(Husbandry)は、世界中に例をみないものと確信するのである。何となれば、火によって更生せしめられた土地は、その内部に何の根もたないから、そこに播種したもの以外は長年に亘って何も生せず、しかも才智のあるひとが望むだけの間役立つに十分な活力を維持しうるからである。かくて、余はお前たちのヒース地に、何よりもかかる農業を採用することを勧める。」「(一四―一五頁)

〔注〕 彼は改良農場の見聞等から、一エーカー当りの作物別の収益を、亜麻四〇〇五〇ポンド、カブ八〇一〇ポンド、クロバー一〇〇二〇ポンド、最良の小麦五〇六ポンド、最良の採草地四〇五ポンドと見積っており、在来的小麦・採草地に対し、亜麻・クロバー・カブがいかに経済的に有利であるかを示している。

彼は、この記述に続いて、かかる土地改良に必要な厩肥の生産についてのフランダーズで行なわれる巧妙な方法を述べている。それは、ヒース地にまず羊を放牧して、夜間に舎内で休ま

せるとき、その床底に三〇四インチの砂を入れておくと、その糞尿が完全に泌みこむから、毎日少しずつ砂を加えて、泌みこんだ砂と替えてゆくと、年間三〇四百頭の羊から一千ロード (load) の厩肥の生産が出来るから、八百頭の羊では二千ロードとなり、それを一エーカーのヒース地に施肥して、これを改良しうるとしている。また、大部分の森林にある泥灰土も砂質地とヒース地の非常に良好な肥料になるから、夏に一エーカーに四〇〇ロードを運んで撒き、冬の期間に土壤と混和しておいて、翌年の三月に前記のデボンシャー法を実施すれば、大いに土地改良が行なわれると述べている。

彼自身の経験によると、「余はヒース以外に何も生じない五エーカーの土地に、この方法を施して、二年間殺作を行なったが、三年目には自然にイングラントのどの採草地にも生ずるような良質の牧草を生ずるようになった。」「(一六頁)と記している。つぎに、彼が強く推奨するデボンシャー法として、Clement Stooke の農場で実見したという方法について、次のごとく述べている。

「彼は、そこでデボンシャー法 Devonshire を施した自らが、燃焼をする前に、各々一ロッド (rod) の正方形の小山をつくり、一エーカーでは一六〇の小山ができるから、それを燃焼するときに、それぞれの小山に一ベック (beck)

の水和しない石灰を投入する。それはちょうど四ブッシェル、つまり一ロート (load) の石灰に当る。この石灰が小山の中で、最初の降雨によって水和されたら、灰とよく混和せしめて、土地に混ぜ、そのあと小麦を播種すれば、その地方並みの収穫があり、さらに次年には燕麦が非常によく出来、その翌年には、彼の農場の他の部分と同様な良質の牧草がとれようになった。」

さて、ウエストンが、息子たちにヒース地の改良法として、デボンシャー法を実施したあとの具体的な作付順序として、次のごとき方式を勧告している。

亜麻・カブ・クロバー・クロバー・クロバー・クロバー
ローバー

これは、まずデボンシャー法を施した土地に、三月上旬に亜麻を播種（エーカー当り三ブッシェル）、それを六月頃に収穫（エーカー当り九ポンド）したあと、同年の七月八月に、その跡地にカブを播種（エーカー当り二・五ポンド）すれば、それが一月下旬に収穫できる。その翌年の四月上旬に、クロバーを播いて採草地とし、この状態を四カ年継続すればよい、というのである。

彼は、さらに五〇〇エーカーの規模で、各区を一〇〇エーカーとし、各区に前記の作付順序を実施した場合、漸次不毛地が

改良されてゆく過程を、年次毎にエーカー当りの収支計算で示しているのであるが、初年度の亜麻・カブと第二年度以降のクロバー四区の計算を一括して示せば次のごとくなる。（ l はポンド、 s シリング、 d はペンス）

費用	収入	利潤
亜麻・カブ 9 1 5 s. 00d	40 00 s. 00d	30s
クロバー 2 00 00	[12 00 00]	10

このエーカー当り試算を、各区一〇〇エーカーに適用すれば、初年度の利潤は三、八〇〇ポンド、第二年度以降は毎年クロバー区一〇〇エーカーの利潤一、〇〇〇ポンドが積算されて、五年目の五〇〇エーカー全部の作付がされた場合の総利潤は七、八〇〇ポンドに達する。ほとんど無価値のヒース地が五年目には、かかる大きな利潤を生む土地に変わるのである。しかも、彼はこれの実施には、なんらの交障がないはずであると述べている。

彼は、この栽培上の種々の注意を与えている。とくに亜麻は当時の衣料原料として重要であったが、当時イングランドでは外国から輸入されて、ロンドンで高値に売られ、それが一旦ランカシャーに送られてリンネルとなって再びロンドンで販売され、さらに余分なものはオランダに輸出されている状況である」とを述べ、彼は息子たちに、フランダーズからリンネルの製

造に熟練した織工を呼びよせて、リンネルの自家製造をも勧めている。これは、かなり思い切った勧告といふべきであらう。

以上、ウェストンの原著の概略によって、ほぼその内容を明らかにした。ここにおいて、前稿からの考証を再検討する点が出てきたし、さらに若干の補遺を加える必要があるので、改めて次の節を加えて、その中でも原著に論及することにしよう。

注(1) Harte, *op. cit.*, Essay I, p. 22, footnote.

(2) *Ibid.*, Essay I, p. 191, Essay II, pp. 11~12

(3) E. Lipson, *The Economic History of England*, 6th ed, 1961, Vol II, p. 373

(4) London. *Encyclopedia of Agriculture*, 1828, Vol. I, p. 43

(5) Stephen Switzer, *The Practical Husbandman and planter*, Vol II, 1634, p. 154

(6) *Ibid.*, Vol. II, p. 137

四

私が原著刊行後の諸農書の考証を通じてえたところは、ハートリブの『遺言』第三版(一六五五)中に挿入された八指図▽が、その要旨であらうという推論であった。それは、前述のご

とく、ほぼ同時代のワーリントンによっても、また此度はじめて実見しえたヤラントンの著述における「彼自身の言葉である」と明記した箇所が含まれることから、一七世紀の農業著述家すら、そのように確信していたであらうことは、ほとんど疑いを容れる余地がないからである。

ところで、もっぱらこの八指図▽を通じて伝えられる内容と、ウェストンの原著の内容とを比較できた現在では、八指図▽は原著の内容の要約でないのみか、実質的にはむしろ相互に矛盾したものであることが判明する。いま、そのいくつかを指摘しておく。

(一) 不毛のヒース地の改良に、最初に焼土法 Devonshire を行なうことは共通であるが、原著では、その直後の一カ年間亜麻とカブを栽培したあとで、クローバーの草地に転換することを勧めているに對し、八指図▽では、焼土法の実施直後にクローバーを播いて、五年間草地としたあとで、五年間を穀物(小麦・燕麥)を栽培するという完全な輪換式農法の方式を示しているということである。もつとも、ウェストンがフランターズで最も教訓を受けたとする Antwerp 近郊の改良農場で実見した不毛地の改良後の作付順序として記しているのは、五年循環の次の方式であった。

ライ麦—燕麥—クローバー共播—クローバー—クローバー

—クロローバー—

これは、開拓当初に穀物が導入されている点では△指図▽と共通しており、作付順序もいくらか△指図▽に近づいているとしても、異なった方式とみることができる。彼が最も感銘を受けた改良農場の典型的な作付順序を敢て母国に採用しようと思わず、全く穀作を入れない上記の作付順序を提案したのは、けだし当時の開放耕地制下の本来の既耕地における穀作農業——つまり当時の典型的な三圃式農法——ではなく、開放耕地や放牧地外の荒地 (waste) に属する不毛地の作付方式のみに限定したの考案であり、ただここにフランダーズの富といわれる換金作物の亜麻とカブを導入することによって、上記の計算例のごとき大きな利潤を挙げることが期待したと推定されるのである。原著で、この利益を強調している箇所を、次に引用しておく。

「お前たちが労働によって、永年ヒースしか生じなかった土地を改良して、最初に見事な亜麻に改え、次に彼等〔附近のひとつと〕がこれまで見たことも食へたこともない美味しいカブが導入され、最後に彼等が驚嘆するようなクロローバーが繁茂するのを見たときは、また彼等が一旦お前たちの作物を見て、いくらかでもそこから幾何かの利益の得られるのを認めることができたときは、彼等はお前たちをあたかも託宣を告げる予言者のごとく思つて寄り集つて、

教えを受け、まずお前たちの種子を相当な値段で購入できるように助力を求めらるであらう。」(二六頁)

(△) クローバーの播種について、△指図▽では燕麦との共播を勧めているに對し、原著では明らかにクロローバーの単播を勧めていることである。クロローバーと燕麦の共播は、前述のごとく、フランダーズで広く行なわれている方法である。彼はこれを実現してその有利性を認めているにもかかわらず、母国の風土には、むしろ単播を勧めている点に、彼のクロローバー栽培に對する独創的見解が現われているとみられる。これに關する原著の一節は、次のごとくである。

「カブを抜いたあと、余ならば、ブラバントとフランダーズにおける一〇〇エーカーにクロローバーの種子を穀物と共播するか、或はその直後に播くやり方を変更して、四月上旬にクロローバーの種子を単独 (alone) に播く用意をするであらう。その理由は、余の *Methodshare* における経験によつて、それは初年目に燕麦の一作に播いたクロローバーよりも遙によく出来て、それ単独で得られる利潤の方が多くなることを判つたからである。」(二〇頁)

〔注〕この記述の内容は、前稿でハートが一六四五年版 (ウェストン本) の一七—一八頁からの引用句とほとんど同じ内容であるが、この短い一節でも、文句や表現に若干

の差異があることから、ハートトリプ本はウェストン本の表現をかなり改えていることが推定される。

かくて、ウェストンのクローバー単播は、強い信念に基づくものであるはずだから、△指図▽のこく燕麦(春播穀物)との共播のごとき正反対の意見の出るのは、不可解といわねばならない。とすると、ハートトリプの『遺言』Legacy 第三版に挿入されているウェストンの△指図▽は、多くのひとびとからウェストンの意見として着目されていたにもかかわらず、全く原著の内容と異なるところのハートトリプによる偽作ではないかという疑念が生ずるのである。そう思つて△指図▽を注意してみると、果してその標題自体に、大きな見落しがあったことが気がつくのである。いま一度、その標題の原文を次に引用してみよう。

Sir Richard Weston more special directions for the best ordering of Clover-grass

私は、この *more special* を強い意味にはとらず、原著の内容を示す形容詞と思ひ違ひをしていたのであるが、いまにして思えば、原著の内容に対して *more special* ということでありしたが、つて、原著と内容が異なっていることを意味していたのである。しかるにサー・ウェストンが原著の刊行のあとで、彼自身がこの特殊な△指図▽のような意見の変更を行なつたこと

はありえないし、況んやそれをハートトリプの手に渡したことは全く考えられないから、この△指図▽はハートトリプの偽作ないしは捏造であると断定しうるのである。

ところで、この偽作は、ハートトリプ自体の立場に基づいての自作か、或は何か他の底本に拠つたものであらうか。ここでふと思ひ当つたのは、この一六五二版の原著に付されたハートトリプの序文中の前述の言葉である。それは、この版をサー・ウェストンに依頼して増補する予定が果せなかつたことを述べたあと、クローバーの栽培法については親友のウォルター・ブライス *Walter Blith* が詳しくその方法を発表しているとし、とくに、「クローバーの種子の使用は、ブラバント農業論 (*the discourse of the Brabant Husbandrie*) の中では、未経験の農業者の能力に適するように十分に説明されていないことが実験によつて分つたから、この欠点を或る程度補充するには、前述のウォルター・ブライス氏の *English Improver* 第三刷(近く刊行の見込)が、それと若下の貴重な実験および特に重要な商品に関するより進んだ指図 (*further directions*) を与えるであらう」と記している点である。この文中のブラバント農業論は、ウェストンの原著の略称であることは他にも用例がある。つまり、ハートトリプはウェストンによる増補をあきらめて、ブライスの著書によつて「より進んだ指図」が得られるとしてい

る点が注意されるのである。

ブライスの著述『The English Improver Improved, 1653』に關して前稿で論及した際には、その中でウェストンがカブを豚の飼料にしたと確言したという記述のあることを確認しうる以外に、ウェストンの原書にふれた箇所のないことを指摘したに止どまった。本稿では、さきにスピードに關する記述の考証から、この第三版で、新たに第二部として一九章が増補され、その中でクローバー等の牧草に關する記述が、はじめて加えられたことを注記しておいた。ここでは、その第二部の中の、彼自身のクローバーの栽培法について、ウェストンの△指図▽と對照して検討してみなければならない。

このブライスの著書の第六章「イングランドの土地に生産される最高の利益があるトレフォイル (Trefoil) または大クローバー (great Clover Grass) の最良の栽培法について」において、まずクローバーの種類と種子に關しての記述があり、その中で最良のオランダ産の種子 (Dutch seed) が大クローバーであるとし、その播種法を述べているところで、クローバーの播種は、單播でなく、夏穀 (春播穀物) との共播を勧めているこれは、ウェストンの原著でなく、明らかに△指図▽の内容と一致している。彼曰く――

「それを放牧しようと思う土地や、採草地や踏みつけられ

る公道の中の裸地に播いてもよい。しかし、その土地を耕作と良い農業に適するようにした場合、一般の方法として勧められることは、大麦または燕麥を播いて、それにハローをかけたあと、同じ土地にクローバーを播いて、一回小型のハローまたは柴 (drag) で覆土するが、穀物は通常やっているほど厚播きにしない」。(一八〇頁)

またクローバーの播種量を一ガロンまたは一〇ポンド、その播種の適期を四月上旬とする点でも△指図▽と一致する。ただブライスは生育したクローバーは年に三作できるが、二作は刈取り、最後の一作は放牧用にしたらよいとし、その第一作の刈取は五月中旬からでもよいとしているに對し、△指図▽では六月一日頃と狭く規定している。採種用の場合は、第一回の刈取後種子の成熟まで置いて収穫するが、その時期をブライスは特に七月や八月に限らず、穀の状況を觀察して、それが色づいてきて茎が乾いて褐色に変じはじめた頃がよく、収穫後は放牧できると述べている。採種量は、ブライスによると、良質の種子に限れば、エーカー当たり四ブノシエルしかとれないが、普通ではそれより多くとれる、と述べているに對し、△指図▽では少なくとも五ブノシエルの種子がとれるとしている。また、クローバーの栽培期間を、ブライスは三〜四年としているが、△指図▽では五年に延長している。もっとも、△指図▽のクロ

バーの栽培は、ウェストンの構想を利用して、不毛地の改良のためのクローバー導入の記述となっているか、ブライスは既耕地でのクローバーの栽培について述べている。もっとも、不毛地での栽培についても、ブライス自身「このことはブラバント農業論において、ひどい不毛地でもよく厩肥を施して、耕耘してからクローバーにすることについて、詳しく述べられている」と記していることく、不毛のヒース地にもクローバーがよくでき、その土地改良に役立つことを認めている。なお、その場合、最初に行なう「evonshring」と呼ばれるヒース地の刈取・燃焼の方法は、かなり古くから行なわれ、一七〇一八世紀の多くの古農書でとりあげているところであるが、△指図Ⅴでは、原著の中のウェストンがClement Stookeの農場で実見したという方法を、そのまま採用している。

かくて、ウェストンの原著の要約と誤認したハートリプの『遺言』中の△指図Ⅴは、そのクローバー栽培に関する記述の主要を、一六五二年版のブライスの著述の内容から盗用し、これに未梢的な変更を加えたにすぎないものであり、ただこれをウェストンの名によって、不毛地の改良と結びつけるために、クローバー導入の前に必要なDevonshringの記述を、ウェストンの原著から援用し、両者を繋ぎ合わせたものであることが明白となった。それは、ブライスの書における△より進んだ指

図Ⅴ (furthur directions) が、サー・ウェストンの名を冠して△さらに特別な指図Ⅴ (more special directions) の標題に変形したものと考えられよう。

ブライスは、前述のごとくハートリプと親交があるのみか、この著書の序文の中でもハートリプの功績を讃えているに對し、ハートリプはこのブライスの著書の内容を盗用し、これにウェストンの名を冠した一文を偽作して、その『遺言』第三版に挿入したことは、友情を踏みにじった何たる厚顔無恥な所業であろうか。それにしても、ブライスの生存中に、臆面もなく盗用したとは思えないから、おそらくブライスは前著の第三版（一六三三）刊行のあと一六三三～三五年の間に逝去し、その死後に急いで前記の△指図Ⅴの一文を偽作して『遺言』第三版（一六五五）の注釈 Annotationsの中に挿入したと想定してみたくなるが、もちろんその確証はない。

それにしても、俾が一〇年後に、博識なワリーリソジやヤラントン等が、ブライスの著述を知悉しながら、△指図Ⅴをハートリプの偽作と看破できず、それをウェストン自身の言葉として引用しているのは不可解というほかはない。況んや後世これがサー・ウェストンの創見として適用したのは、無理からぬことであつたといえよう。

④ 最後に、私が前記の△指図Ⅴを原著の要約と思いこんで

いたための大きな見落しは、ウェストンのカブ導入説に關してであり、在来のブライスの引用を根拠とする導入説に對しては、ほとんど問題外として取扱つてきたことである。ところで、原著では確かにカブに關する記述があり、しかも息子たちへの遺言としての不毛地の改良のための作付順序の中には、クローバーの前作として亜麻とカブの栽培が勧められていることは、すでにみた通りである。これによれば、ウェストンのカブ導入説は十分考慮すべき根拠があるとしなければならない。

そこで、彼のカブに關する記述について、少し立入つて考察してみよう。原著の中に次の一齣がある。

「カブの農業 (Husbandrie of turnip) は、亜麻と同様、Gaunt と Antwerp の間で普通に行なわれている。その理由は、亜麻の收穫直後にカブが播かれるが、ライ麦の後に播かれる。そのカブは彼等自身は食べないで家畜に与えるが、それは乾草や燕麦と同じ程度に、牝牛や牡牛を肥育しうるのである。その根をきれいに洗つておいて、根と葉を飼料槽に入れて、いっしょに切斷機で刻んで、そのあと水を入れて煮て牝牛に与えると、豊富に牛乳を泌させることができる。唯一つの難点は、最初に家畜に食べさせるときは、彼等がやつているように、手で食べさせてやらねばならないことである。」(二五頁)

このあと「ロッド (rod) つまり一六 $\frac{1}{2}$ フィート平方には、 $\frac{1}{2}$ フィートの間隔で、カブが一〇八九本植えられ、その生育したカブをロンドンの市価で評価した有利さを説明している。

〔注〕 前稿でふれたカニングガム W Cunningham のサー・ウェストンのカブ導入説に關し、「根莖類 (root crops) が或る程度農業の循環の中に導入されたようである。ウェストンは、これらに触れている」として挙げた出典『Discourse of Husbandrie used in Brabant, 1652, p. 25』は、この引用箇所に當ることから、カニングガムの説を根拠不明と評した前言は、ここで改めて取り消さねばならない。

しかしながら、ウェストンが当時畜力犁耕を前提とした広大な耕地の主穀式農業 (husbandrie) の中に、条播・中耕を不可欠とするカブを導入することに成功したとなす説には、とうてい承認できない。かりに広大な開拓地で実行したとしても、尨大な人力を用いた園芸的方法 garden culture の拡大として実現するはかはなかつたはずである。それは、前記のブライスの著述の中で、カブが取りあげられているのも、それはあくまで園地の garden crop の一つとしてであつて、耕地へ導入された field crop とはつてはなない。いな、一八世紀前期に、有名なカブのタウンゼント “Turnip” Townshend のカブ栽培で

すら、*garden crop* の拡大としての栽培であつて、*field crop* としてのカブ栽培の技術的基礎は未だ確立してなかったことは、すでに述べた通りである。

したがつて、ウェストンをもつて、カブの耕地への導入者とする説には、依然として賛同しえないのである。

五

以上、かなり長文となつたが、ウェストンの『ブラバントおよびフランダース農業論』の考証を一とおり終えたことになる。原著として利用したのは、前述のごとく、いわゆるハートリプ本第二版（一六五二）であり、これは大英博物館に所蔵されているものである。さらに、同じ版が前稿でうっかり見落したが、イングラント王立農業協会 *Royal Agricultural Society of England* の蔵書目録中にも見えるから、少なくともハートリプ本に関しては、いわば幻の書でなく、広く閲読できるものといえる。にもかかわらず、従来のイギリスの農業史家および経済史家の大部分が、この原著の内容を十分に把握した上で、の論述がほとんど皆無である。しかも、ウェストンの名のみ伝説的に高く評価され、原著の内容については、およそ次のごとく混同・誤用されて、それぞれがほとんど怪まれることなく、今日までウェストンの意見として通用しているのである。

- (1) ハートリプの『遺言』を原著と混同するもの。
- (2) ハートリプの『遺言』第二版（一六五二）の序文のみを原著の内容とみるもの。

- (3) ハートリプの『遺言』第三版（一六五五）中のウェストンの名を冠した△指図▽を原著の内容と混同するもの。

- (4) ブライスの *The English Improver Improved* 中のウェストンのカブに関する確言と称するもの、またはこれを拡張的に利用したラウドンの農業百科事典中の記述による誤信。

- (5) スジョードの *Adam out of Eden* 中のウェストンのクローバー栽培に関する実見記による誤信。

私は原著を実見しえない前までの考証では、(3)の△指図▽を原著の要約とみなしたのは、大きな誤りであつた。これはワーリッジはじめ多くのひとびとをまどわしたハートリプの巧妙な偽作であつたことを、本稿でつきとめることができた。このハートリプ本の初版（一六五〇年誤植本）は、タークスも実見しており、フンセルは英大博物館の蔵書にあると記しているが、いまのところその確実な所在は明らかでないとしても、恐らくどこかに所蔵されている可能性はある。その初版とこの第二版の内容の差異はいまのところ具体的に調べるすべはないが、若干

の文句や表現の訂正等が加えられているであろうことは、この第二版のタイトルページに「増訂」(Corrected and Enlarged)と表記していることからでも窺われる。しかし、初版が四ツ折判で二六ページに対し、第二版は小型四ツ折判の二七ページであるから、増補されたというのは疑わしいし、その改訂も、サー・ウェストンとは無関係に、ハートリブの手による恣意的な改作・訂正としか考えられない。

さらに最初の一六四五年刊のいわゆるウェストン本は、農書考証家のハートおよびR・ウェストンの記述以外には、それを実見したという確証はない。元來このウェストン本は刊行直後ですら稀靚書であったと想定されるから、恐らくは現在亡失してしまつたものと考えられる。その内容は、ハートリブ本とかなり異なっていたであろうことは、たとえば、前稿の末尾にR・ウェストンの一六四五年版の四頁から引用した一節のごときは、このハートリブ本第二版には、全く削られている。ハート自身は、その著述の中で、ウェストン本とハートリブ本を、それぞれ別に利用していることから、両者にかんがりの差異があることが想像される。いずれにしても、一六四五年の最初の刊行書つまりウェストン本こそは、まさに八幻の書¹⁾というべきであろう。

さて、ともかくハートリブ本の第二版の内容を実見したあと

で気付くことは、従来の農書類の中では、ハートを除いて、例えば前述のロード・アーン⁽¹⁾ルやラノセル⁽²⁾ガルニエ等⁽³⁾の著述の中に、その出典が明記されず、いわば落ち穂拾ひ的に断片的な字句が利用されていることである。ところで、私の目についた最も多く原文が引用されているのは、前述のタルの論敵であるスウィンナー Stephen Switzer 編の The Practical Hasbandman and Planter, 2 vols, 1733 ~ 34 の第二巻中のクロバーに関する章 (Vol. II, No V) の中でハプラバント農業の尊敬すべき著者⁴⁾の言葉として、引用している箇所である。これを原書と照合してみると、表現上の修正はされているが——それは或はハートリブ本初版の引用かもしれない——まさしく原著のクロバーに関する記述を抜萃したものであることが判明する。

〔注〕 このスウィンナーの編著の多くのウェストンの名による記述は、前稿で検討したように、大部分がハートリブの『遺言』との混同による著しい例であるが、その中に明らかに原著に基づく筆が含まれていることは、この編者がスウィツァー以外の数人の手による合作であることを如実に裏書きしている。

なお近年では、フッセルの農書考証におけるウェストンに関する記述には、処々に原著の内容が混入しているが、その内容

はきわめて断片的な綴り合わせのものでしかない。また、オランダの農業史家バス Sluher von Bath が、この一六五二年版の原著を実見しているようであるが、一六四四年の Waes 地方の六年作付順序として、亜麻・カブ・燕麦・クロバー（ローバー・クロバー・クロバー・クロバーとあるのは、⁽⁴⁾）原著の作付順序には該当しない。

社(1) Lord Ernle, *op cit*, p 113

(2) R H Garner, The Introduction of Forage Crops into Great Britain—*The Journal of Royal Agricultural Society of England*, 1896 (3rd Series, Vol. III, p. 80)

(3) Fussel, *op. cit*, pp 41~43

(4) R Sluher van Bath, The Rise of Intensive Husbandry in the Low Countries (*Britann and Netherland*, 1959, p 134)

六

ここで一応要約的に結びの言葉を叙しておきたい。この考証に当って渉猟した農書類は、かなりの数に上るが、ウェストンの名を挙げている大部分が、その原著の内容に若干でも立入ったものは、上述のごとく一部に限られており、これまでも正確

な考証は全くみられなかった。幸いにして、ウェストンの原著——正確には一六五二年版のいわゆるハートリプ本——を実見しうる幸運に恵まれて、これによって再検討を行ない、ほぼ正しい考証に達したと考える。

原著の内容は、当時のフランダース農業の見聞記としてまことに興味津々たるものがあり、とくにその中のクロバーおよびカブの栽培に関する記述は、私の知る限りでは、確かにイギリス農書で最初のものとして断定しうる。その意味では、イギリス近代的農法の形成過程における重要な里程碑としての意義をもつことを認めなければならないであろう。しかしながら、彼がこの旅行によって得た知見に基づいてなされた遺言の形の勧告の内容は、当時の農書の水準からいって決して卓越したものとはいえない。また、彼を目して、イギリスにおける輪換式農法 convertible (alternate) husbandry の創設者とか、或は輪換式農法の創唱者となすときは、まことに皮相な見解といわねばならない。

彼が勧告している方法は、前述のごとく、まだ本格的な輪換式の作付方式にすら達しているとはいえない。もっとも、彼は既耕地でなく、もっぱら不毛地・ヒース地の改良を目的とする作付方式に限定して述べているとしても、不毛地の開拓後における地力維持は、クロバーの連作区による放牧・採草によつ

て十分確保されるとしても、不毛地開拓に最も被害を与える凶悪な雑草防除体系には、きわめて楽観的で全く論及していない。その点は、一六世紀前期のマーカム Gervase Markham の *Farewell to Husbandry*, 1620~21 に於て、粘質・砂質等の各種の土壌の種類毎に、さらにヒース地等の不毛地開拓に伴う輪換式農法の作付方式の型を具体的に記述しており、しかしその中にはそれぞれの土地の雑草に対する周到な防除法が説かれている。事実、この書は、前編にもふれたように約一〇版を重ね、ウェストンの原著の刊行期間（一六四五~五二）にも第四版（一六四九）が刊行され、その後にも、さらに五刷（一六五六、一六六〇、一六六八、一六七六、一六八四）を重ねていることから、当時マーカムの著述がウェストンのそれよりも遙に高い好評を持続して、イギリスの輪換式農法の形成に大きく寄与したことを立証していると考えられる。

ウェストンの原著の特色は、クローバーおよびカブの耕地導人に求められるであろうが、その面での評価も、一六四五年のウェストン本は当時ほとんど普及しなかったと考えられるから、主としてハートリプ本によるものとみなしうる。しかも、前記の一六六三年に刊行されたブライスの *The English Improver Improved* が遙に実践的なクローバーの栽培法を述べているのである。サー・ウェストンの原著の刊行者ハートリプ自身が、

このブライスの著書の出現によって、早速これを盗用して、ウェストンの伝説的名声を利用して、いわゆるA指図Vとして利用したことは、此度の考証で明らかにしたところである。それが当時の博識家のワーリッジをはじめ多くのひとびとをすら誤認せしめていることからみても、当時すでにウェストンの三版を重ねた原著が実際にはほとんど普及せず、実際の影響力をもたなかったことを裏書きしている。つまり、ウェストンはクローバーの導入者というだけの偶像的な権威として、伝承的にイギリス農業史および経済史の上に不朽の名を留めているというも過言ではあるまい。いうなれば、かの有名なヘーコン Francis Bacon のイドラ破壊の精神に立脚する一七世紀の科学革命の過程において、奇しくもウェストンは新しい入市場のイドラVとして造型されたといえよう。（一九六七・三・五）